opusdei.org

黙想の祈り:聖トマ ス・モア(6月22日)

黙想のテーマ:「良き夫、よき父親」「隅々まで福音の光で照らす」「英雄性に貫かれた日々」

良き夫、よき父親

隅々まで福音の光で照らす

英雄性に貫かれた日々

聖トマス・モアは1478に生まれ、 1535年に殉教した、法学教授、弁護 土として信望を得ていた人です。公 的な多くの役職につき、1529年には 大英帝国の宰相(首相)に任命され ました。これらの司法的・政治的役 職を、ルネッサンス期のずば抜けた 知者の一人に数えられていたほどの 人文主義者としての研究と、両立さ せていました。当時の最も著名な人 文主義者、ロッテルダムのエラスム スが、彼に最高の賛辞を寄せていま す。「自然がこれ以上、巧みで独創 的で、節度のある、細やかな性格を 作り上げることができるとは考えら れない (…)。友達の内で最も穏や かな人で、品位と機知の混ざり合っ ている彼と付き合うのは楽しい|

 $[1]_{o}$

法廷においても宮廷においても、要求の多い解決すべき仕事がトマス・モアに欠けることはありませんでした。しかし、職務上、家族を顧みない状態になる可能性もありましたが、いつも、良き夫、よき父親であ

ることがより重要であることを心底納得していました。旅行で暫く留守にしたとき、長女あての手紙にこうしたためています。「私の不注意から子供や家庭が破滅したりする前に、仕事を手放し、皆のことに全力を注ぐため、私の全ての財宝を使い尽くそうと考えている」[2]。

事実、彼は、家庭が幸せの中心とな り、同時に小さな〈親しみ深い学 校〉であるように、最大の努力を傾 けました。トマス自身、良き教師と して六人の子供たちに、教理に加え 人文学と科学を教えました。彼はあ る教師に、教育において優先すべき ことは何かを述べています。「必要不 可欠なことは、彼らが高潔な生活を 送るようにすることです。それに続 くのが勉強です。それゆえ彼らは、 自身をキリスト信者として謙遜で節 度ある人になるように導く、また神 への忠誠と隣人への愛に導く、種々 の科目を勉強しなければなりませ

ん。すると彼らは、良い評判の生活を送り、死を考えて怯えることもないでしょう。心に真の喜びを秘めているのですから」[3]。

聖トマス・モアへの信心のあった聖 ホセマリアは、1954年、彼を公的機 関とのかかわりのための仲介者にし ました。1958~1962の間のイギリス 滞在の折、度々カンタベリーにある 聖人の遺体の前で祈りました。この 英国の聖人の伝記を書くように、あ るメンバーに勧めました。創立者に は、ルネッサンス期の激動の世界 で、神の恩恵によって、信徒として 聖性に達した素晴らしい模範だと考 えられたからです啊。というのも、 福音の光であらゆるところを照ら す、つまり、家庭や職場、社会環境 や文化の隅々を照らしだすことに招 かれているのは信徒だからです。

[5]0

 世の生活を一介の訪問者のような通いでし方にする事はでもないのいません。通りを見知られている。 を見知ら恐るがいるがではありません。 世界はなるがです。私たちるとはからがです。 がい世を受けるがいかがいません。 ではるのがでするとになりません。 ではのません。 ではのまたなのものがにいる人です」 「「」。

トマス・モアは、毎日ごミサを欠か さず、日曜日には教区の聖歌隊の一 員として与っていました。社会的 身分にかかわらず、貴賓席に着くれ うなことはなかったのです。それに 関して、ある貴族たちが、国王は、 自己の帝国宰相が尊敬もされずらと を快く思われないだろう。する に注意したことがありました。する

と、機知にとんだ細やかな答えが あったのです。「私が、私の王様の 主を公けに礼拝していることが、王 様をご不快にすることなどあり得ま せん | 「一」。心の底から祖国と王を愛 していました。そして何よりも神を 愛していたのです。それゆえ、キリ ストへの忠実か、良心に反すること になる法かを選択すべき悲劇的なこ とが訪れた時、聖トマス・モアはた めらうことなく神のみ旨に従いまし た。もちろん、それは、社会的な地 位や財産、その命までも危険にさら すことを承知の上でした。

この特別な状況における英雄的な応答は、事実、長年の日常生活を英雄的に生きた結果なのです。例えば、聖トマスは、重要な事柄の決定をよるの理体拝領なしにすることはありませんでした。また、自分をありませんでした。また、信仰をあって熱心に祈り、しつこくおとは寛していました。また友人たちとは寛

大に思いやりをもって接し、周りの 貧しい人たちを気遣ってにおいまってはいまってはいまってはないまった。とこれはないます。全は、ないます。はないです。ですいかったのですが、本のですが、本の生活を通して、変き上げられたのす」。。

ない模範として尊敬されているのです。また教会外でも、特に人々を指導するよう招かれている人たちの間で、着想の泉として知れ渡っています」[10]。

[1] アントニオ・シカリ『聖人伝』、(Antonio Sicari, Ritratti di santi, vol. 1, p. 40)。

[2] バスケス・デ・プラダ『トマス・モア卿』(Vázquez de Prada, Sir Tomás Moro, pp. 180-181)。

[3] マリアノ・ファチオ『流れに逆 らい、自由を目指して・・・』 (Mariano Fazio, Contracorriente…

hacia la libertad, pp. 15-16) 。

[4] A. ヘガティ、「オプス・デイの仲介者としての聖トマス・モア」

(A. Hegarty, "St. Thomas More as

- Intercessor of Opus Dei", en Studia et Documenta, n. 8 (2014), pp. 91-124) 参照。
- [5] 聖ヨハネ・パウロ二世『信徒の 召命と使命』34番。
- [6] フェルナンド・オカリス『福音の光のもと』(Mons. Fernando Ocáriz, A la luz del Evangelio, p. 84)。
- [7] アントニオ・シカリ『聖人伝』 (Antonio Sicari, Ritratti di santi vol.1, p. 40)。
- [8] 聖ヨハネ・パウロ二世、聖トマス・モアを為政者と政治家の保護者と宣言する使徒的書簡(2000年10月31日)、4番。
- [9] 『現代世界憲章』16番参照。
- [10] 聖ヨハネ・パウロ二世、聖トマス・モアを為政者と政治家の保護者

と宣言する使徒的書簡(2000年10月 31日)、1番。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-thomas-more/(2025/12/16)